

IFERI 主催カザフスタン・日本学生知的学術会議報告書

1. 全体の流れ

開催日：2009年12月9日（水）

会場：カザフスタン・日本人材開発センター “セミナールーム3”

参加者：筑波大11名

カザフ民族大13名

カザフ国際関係外国語大4名

日本センター1名 (計18名)

テーマ：日本側 「作文コーパス」「若者言葉」「共生」

カザフ側 「社会における男女の役割」「うちとそと」「若者のライフスタイル」

タイムスケジュール

時間	内容	時間配分
9:30-9:45	開会式 ・カザフスタン日本人材開発センター所長 ・小野澤正喜筑波大学特任教授 ・趣旨説明（筑波大学 小野正樹准教授）	15分
9:45-10:45	プレゼンテーション（筑波大学） 第Iグループ 共生 第IIグループ 若者言葉 第IIIグループ 作文コーパス	20分×3グループ
10:45-11:15	指定討論者による質問タイム （カザフスタン側の指定討論者から各グループに三つの質問）	10分×3グループ
11:15-12:15	ディスカッション・タイム （カザフスタン側の学生は興味があるグループに行き、ディスカッションに参加。）	60分
12:15-12:25	まとめの時間 （各グループでディスカッションした内容をまとめる）	10分
12:25-13:00	ディスカッション報告タイム （まとめたディスカッションの内容を報告）	10分×3グループ +5分
13:00-13:10	・総括（筑波大学 一二三朋子准教授） （午前中の発表について総括的な評価をし、各グループに対するコメントを述べた）	10分

13:10-14:00	昼休み (昼食)	50 分
14:00-15:00	プレゼンテーション (カザフ国立大学) 第Ⅰグループ うちとそと 第Ⅱグループ 若者のライフスタイル 第Ⅲグループ 社会における男女の役割	20 分×3 グループ
15:00-15:30	指定討論者による質問タイム (筑波大側の指定討論者から各グループに三つの質問)	10 分×3 グループ
15:30-16:30	ディスカッション・タイム (筑波大側の学生は興味があるグループに行き、ディスカッションに参加。)	60 分
16:30-16:40	まとめの時間 (各グループでディスカッションした内容をまとめる)	10 分
16:40-17:15	ディスカッション報告タイム (まとめたディスカッションの内容を報告)	10 分×3 グループ +5 分
17:15-17:30	閉会式 ・総括 (カザフ国立大学 講師ショリナ・ダリヤグル) (午後の発表について総括的な評価をし、各グループに対するコメントを述べた。)	15 分

(以上、文責 人文社会科学研究科国際地域研究専攻 劉贇、呉瓊、下堂菌明美)

2. 各テーマの紹介

2. 1. 多文化社会で生きること

今回私たちのグループ¹が取り上げたテーマは「多文化社会で生きること」についてである。近年日本では「共生」という言葉がよく聞かれるが、その定義や概念についてはあいまいな部分が多い。日本における外国人の増加に伴って聞かれるようになった「多文化共生」について考察し、日本人と外国人の共生観の違いをアンケート調査、事例比較によって明らかにすることが本テーマの目的である。

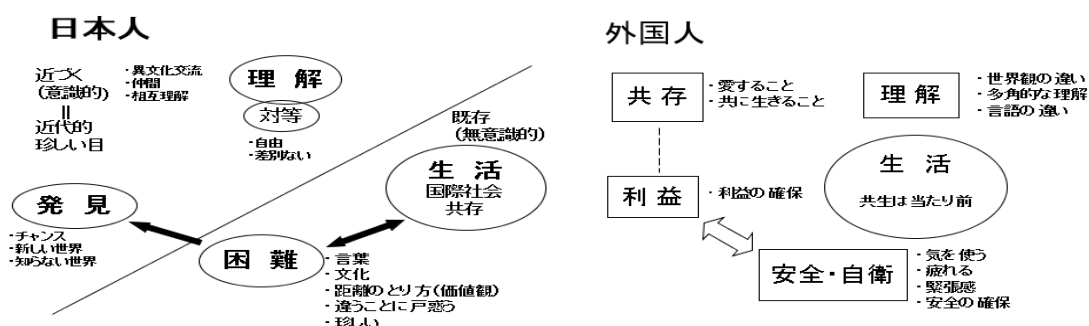
プレゼンテーションでは、まず、外国人をめぐる日本のこれまでの状況について説明した。1980年代以降、日本には多くの外国人(ベトナム・ラオスの難民、中国帰国者、技能実習生、日系ブラジル人等)が来日した。日本で暮らす彼ら外国人はニューカマーとよばれ、地域社会ではニューカマーとの「多文化共生社会」をいかに築くかが大きな課題となった。それに伴い、「共生」という言葉が新聞やインターネット等で多く使われるようになっていった。また日本政府も、多文化共生推進プラン(2006)を掲げ、多文化共生を「国籍や民族な

¹本グループは高原真理、河野あかね、ベケバソヴァ・アセリ、山下絵里 (以上、国際地域研究専攻)、馬場裕 (教育研究科) の5名で構成されている。

どの異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義づけた。

しかしリーマン・ショックによる日本経済の悪化で、日系ブラジル人をはじめとする多くの外国人が仕事を失い、その対応策として日本政府は「日系人離職者に対する帰国支援事業」及び「日系人就労準備研修事業」を開始した。しかしこれらの事業は不十分なところが多く、先にあげた政府の「多文化共生社会」理念に沿ったものとは言い難くなっている。

では、そもそも「多文化共生」のあり方を、皆が同じイメージとして等しく共有しているのだろうか。そこで、日本人と外国人各 20 名に対してアンケートを実施し、「外国人（日本人）と同じ社会で暮らすこと」にはどのようなイメージがあるか、一言で表すならどのような言葉が当てはまるかを記述してもらった。解答結果は KJ 法²をもとに分類し、分析した。日本人、外国人それぞれのなかであげられた主なキーワードを大別し、それを以下のように図にした。



日本人から出たキーワードを分析すると、「理解」「発見」などの言葉から、まだ外国人を「珍しい」ととらえている様子が伺えた。外国人と暮らすということがまだ当たり前のことになっておらず、一線をひいている印象がある。また外国人から出たキーワードを分析すると、生活を中心にすえ、「利益」「安全・自衛」などを考えていることが伺えた。

アンケートに加えて、日本以外の国ではどのような「共生」がはかられているのかを知るために、インドネシア、マレーシア、シンガポールの現状について調べ、インドネシアとマレーシアについては、それぞれジャワ系インドネシア人と中国系マレーシア人にインタビューを行った。

これらアンケート及びインタビューを実施して日本人と外国人の結果を分析したところ、外国人はお互いの利益や安全を考慮した上で、お互いとの距離を保ちながら生きていくという傾向がみられた。それに対して日本人はお互いに足並みをそろえて行動するという傾向がみられた。また、日本人は「共生」を「日本人」と「外国人」という大きな社会でとらえているのに対して、外国人は「家族」「恋人」などと小さな社会でとらえていることが

² 川喜多二郎(1970)の考案したデータ・情報の統合方法。

わかった。

以上のことを踏まえて、ディスカッションの議題を以下のように設定した。

1. 外国人と共に社会で生きるとは
2. 多文化社会での言語が果たす役割とは
 - 日本に住む外国人にとっての「日本語」
 - カザフスタンの「カザフ語」と「ロシア語」

(以上、文責 人文社会科学部国際地域研究専攻 高原真理)

2. 2. 若者言葉について

「若者言葉」とは若い世代特有の言葉である。これらの言葉は、仲間内で使われ、仲間意識を強める作用がある。さらに、「若者言葉」には新鮮で好感の持てるものもあり、日常生活で使われる日本語に大きな影響を与えることもある。

「若者言葉」を通して、若者の価値観の一部、自立認識、自尊（自分の能力や潜在能力に自信がある）認識、友達とのつながり方、コミュニケーションの相手と言葉の重要性、競争社会に対する認識、現代の若者たちの悩みや矛盾などが見えてくる。

すなわち、「若者言葉」の使われる場面を明示的に分ければ、日本語学習者にとって、大変良い教材なのではないかと考え、私たちのグループ³は「若者言葉」というテーマを選んだ。

私たちのグループは映画「ハチミツとクローバー」を見せ、この映画に使われた「若者言葉」を例にして、場面を分けて、紹介することにした。

まず、映画「ハチミツとクローバー」の中に使われた「若者言葉」は主に終助詞、省略、ぼかし、曖昧な表現、音便、接尾辞などである。それをもとに、「若者言葉」の分類を図った。

言語形式では、①接尾辞・接尾語、②形容詞・感動詞、③複合語・造語④ら抜き言葉、⑤副詞の意味・用法のゆれ、⑥五段活用動詞+使役の助動詞、⑦形容詞の連用修飾のゆれ、⑧形容動詞型の連用形の語形のゆれ、⑨並列表現の後の助詞を省略する傾向、⑩「助動詞「ない」+すぎる」と「助動詞「ない」+さ+すぎる」のゆれ、⑪格助詞の使用のゆれ、⑫動作性のある名詞の動詞化、⑬動作性のない語のサ変動詞化、⑭「～べき」「～のでは」による文終止の増加、⑮助数詞の使い分けが行われない傾向、⑯慣用句の意味・用法のゆれ ⑰外来語・外国語・和製英語・省略語の17種類を示した。

次に、音韻的な特徴から、①連濁の有無のゆれ、②同じ終助詞でもアクセントによって、男女用語に分かれること、③数字の読み方におけるイチニ系・ヒトフタ系のゆれがあることの現象を示した。

他にも、①強調、②情緒、③曖昧、④ぼかし、⑤方言に基づく現象を提示した。

³本グループは周莉莉、許家瑤、下堂園明美（以上、国際地域研究専攻）の3名で構成されている。



発表の様子（下堂園明美）

（以上、文責 人文科学研究科国際地域研究専攻 周莉莉）

2. 3. 作文データコーパスを用いた研究

2. 3. 1. はじめに

カザフスタンという日本語母語話者が少ない学習環境では、カザフスタンの日本語学習者は数少ない日本語教師からしか日本語についての情報を得ることができない状況が予想される。そこで本グループ⁴ではインターネット上に存在するコーパスを紹介することで、日本語学習者の自立的な学習が推進できると考え、「作文データコーパスを用いた研究」をグループテーマとして据えた。

本グループの発表は、「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース」という作文コーパスとグループメンバーが行っているコーパスを使用した研究についての紹介を行い、コーパスを利用したデータ分析の方法を紹介する。

2. 3. 2. 発表内容

グループ発表は以下の発表内容に沿って行った。

- 1) 目的
- 2) 作文コーパスの紹介
- 3) 研究内容紹介（3名）
- 4) 問題提起

⁴本グループは伊藤秀明（国際日本研究専攻）、呉瓊、劉賛（以上、国際地域研究専攻）の3名で構成されている。

2. 3. 3. 発表内容概要

本グループでは発表に際して、①インターネット上で使用できる作文コーパスを紹介する、②作文コーパスを用いた研究の紹介をする、③コーパスを使用した研究の可能性を探る、という3つの目的を設定した。

次に、作文コーパスの紹介では「コーパス」という存在自体がカザフスタンでは知られていないことを考慮し、「コーパス」というものは、「言語研究に使用するために大量に収集されたデータ」であること、そして「日本語だけではなく、さまざまな言語でコーパスというものが構築されている」ことを述べた。そして、日本の国立国語研究所の宇佐美洋氏を中心に構築された「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース」（以下、作文データコーパス）の説明へと移った。ここでは作文データコーパスには、①日本語学習者・日本語母語話者による日本語作文、②作文執筆者による①の母語訳、③日本語教師による①の添削、④作文執筆者・添削者の履歴、の4つのデータが22カ国分収録されており、様々な条件を設定することによって、より自分が必要とするデータを抽出できるという作文データコーパスの利点について触れた。

続いて、グループメンバーそれぞれの研究内容紹介では、まず、劉贇氏が「モダリティの使用と作文ジャンルの関係についての考察」というテーマのもと、作文データコーパスを調査し、「説明文の場合は日本語母語話者、日本語学習者ともに命題文を多用し、意見文は日本語母語話者、日本語学習者ともにモダリティの使用率はそれほど変わらない」という結果を得た研究を紹介した。次に、吳瓊氏はテーマを「日本人作文と日本語学習者の意見文における文章構成の比較」として、作文データコーパスの意見文における日本人母語話者と中国人日本語学習者の文章構成を比較した結果、「日本語母語話者は意見を初めに書き、その後に意見を支持する文を続ける演繹パターンが多く、中国人日本語学習者は意見を書く場所は定まっていないが、日本語母語話者と同様の演繹パターンが多い」ことを明らかにした研究を紹介した。最後に、筆者が「日本人・学習者における作文添削の相違」というテーマで、劉贇と吳瓊の研究が作文データコーパス内の作文を分析する手法であったのに対して、作文データコーパスの作文をさらに他の人に添削をしてもらうという作文データコーパス内の作文からさらに研究を広げる手法を紹介し、コーパスの様々な利用法を提示した。

最後に本グループとして発表後のディスカッションに向けて、①他にどのような研究が考えられるか、②共同研究の可能性はあるのか、③日本語学習者としてどのようなコーパスが必要か、また利用したいか、の3点を発表後の議論の問題提起として挙げ、終了した。

(以上、文責 人文社会科学研究科国際日本研究専攻 伊藤秀明)

3. 議論内容

3. 1. 多文化社会で生きること

カザフスタンでは、旧ソ連時代に国外に出ていったカザフ人を呼び戻す政策が行われ、カザフに戻った人々、オラルマンをめぐって日本における日系ブラジル人問題と似たような状況が起こっているとのことだった。議論に加わった人の中にもオラルマンの学生がいて、言葉（ロシア語）が進学や就職の壁になるオラルマンが多いことが話題となった。

また言葉については、カザフではロシア語とカザフ語が使用されているため、それぞれについてどう捉えているのか質問したところ、ロシア語は様々な情報を得るために必要であり、カザフ語はアイデンティティーとして重要だと捉えていた。

日系ブラジル人は日本語を学ぶべきかという問いを投げかけてみたところ、お互い分かり合えるための「共通語」だから学ぶべきではないかという回答を得た。日本では「共通語」といえば、一般的に東京方言をさす。しかしカザフスタンの学生は在日ブラジル人や中国人などと会話をするときの日本語が「共通語」であると考えており、これは日本人にとって新しい発想であった。

ディスカッションでは議題のテーマの結論を出すには至らなかったが、お互いの認識について話し合い、そこから示唆的なアイデアを多く得ることができ、非常に有意義な時間を過ごすことができた。今後外国人が増えることが予想される日本にとって「多文化共生」は避けて通れない問題である。お互いにとって「共生」とは何か、今後も考えていく必要性を語り合った。

参考文献

青山亨(2007) インドネシアの多言語・多文化社会

<http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer-education/files/%E5%A4%9A%E8%A8%80%E8%AA%9E%E5%A4%9A%E6%96%87%E5%8C%96%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E3%81%A8%E3%81%97%E3%81%A6%E3%81%AE%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%8D%E3%82%B7%E3%82%A2.pdf>

総務省(2006) 多文化共生推進プラン

http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/2006/060307_2.html

(以上、文責 人文社会科学研究所国際地域研究専攻 高原真理)

3. 2. 若者言葉について

ディスカッションでは、様々なテーマがあったが、ここでは、主立ったものを紹介する。

①カザフスタン側：どうして若者じゃなくても若者言葉を使うようになるのか。

筑波大学側：まず一つ目に言語は常に変化するということがあるものです。若者言葉のような“誤用”が定着することによって、新しい言葉が生まれます。このような新しい言葉は辞書などに載せることもあります。そのため、いろいろな世代に知られるようになるので、このような

言葉を使うことによって仲間意識を強めることができます。ですので、30代40代の人でも使うようになってきています。

②カザフスタン側：若者言葉の悪いところは何ですか。

筑波大学側：若者言葉は相手に不快感を与えてしまうものがあります。さらに、適切な場合はまた適切な時に使わないと、自分の品格を下げるものもあります。これらが若者言葉の悪い面です。

③カザフスタン側：日本語と友達になるのに、若者言葉を勉強したほうがいいのか。

筑波大学側：これは相手と自分の性格にもよると思います。相手がよく若者言葉を使う人であれば、若者言葉を使ったほうが親近感がわくので勉強したほうがいいと思います。しかし、若者言葉を嫌がっている人ならば、使わないほうがいいでしょう。

次に、ことばの現象について、カザフ側とは、以下の質問・回答を行った。

① 「わ+よね」といえますか

女性使っても、男性は言わないほうがいい。

② 「わ」についても男性でも使えますか。

昔は確か女性用語でしたが、今はイントネーションによって、男性が使える場合もあります。イントネーションが高い場合は、女性言葉と見られますが、低い場合は男性も使えます。

③ こんくらいの「こん」についてどのように理解したほうがいいですか。

ここの「こん」は「この」という意味です。話し言葉と見られます。

④ 「やっぱ」はいつ使えますか。

「やっぱ」は「やはり」の話し言葉なので、ゼミや正式な場で使えない。というのは友達どうしの中でできるだけ使ったほうがいい。

本交流を通じて、若者言葉の位置づけとカザフ側の学生達が日本の若者言葉についてどのように考えているかの現状がわかった。例として、「よね」について、カザフ側の学生にはほとんど会話の中で使われていない。相手の発話でも「よ」、あるいは「ね」のいずれかと理解しているようである。またカザフ語の中にも、日本語のような省略される若者言葉、新しく作られた若者言葉は多くあり、共通の現象であることがわかった。さらに、カザフ側の学生が若者言葉を勉強したいという願望がとても強いようである。最後若者言葉の高齢化の傾向、若者言葉の乱用についても話題となった。

(以上、文責 人文社会科学研究所国際地域研究専攻 周莉莉)

3. 3. 作文データコーパスを用いた研究

3. 3. 1. 指定討論

指定討論では指定討論者であるカザフスタン民族大学の学生 2 名から①コーパスはいつから使用されているのか、②コーパスの欠点は何か、③日本ではコーパスは研究者だけではなく、一般の方も使用するのか、という 3 点の質問を受けた。

まず、①については、コーパスはアメリカで 1950 年代に R.Quirk 等が各 5000 語からなるサンプルを書き言葉 100、話し言葉 100 集めたものに端を発し、1965 年には 100 万語規模の電子化コーパスが発表された。現在では The Bank of English という 5.24 億語規模のコーパスが発表されている。また、日本では 1951 年に語彙調査や方言調査などとして社会言語学的実態調査が行われた結果が残されている。また、1956 年には計量国語学会が創設され、その機関誌は 50 年以上続いており、世界に類をみない機関誌となっている。そして、1964 年に作成された『分類語彙表』は国立国語研究所が日本語教育における基本語彙を選定した際にも資料として使用された。と回答した。

次に、②については、コーパスの大きな欠点として追跡調査ができない点が挙げられる。今回の発表のような調査の場合、「なぜそのように書いたのか」という疑問を持ったとしても、それを被調査者に追跡のインタビューを行う等の調査は行えない。つまりコーパスは、ある言語の現況を知るのには有効であるが、「なぜそのようにしたのか」という原因を探ることにはあまり適さない。と答えた。

最後に、③については、コーパスというものの自体が言語研究の資料として作られているため、主に研究者が使うものとなっている。しかし、今回のような作文コーパスなどは日本語教師が「いい作文」「あまり良くない作文」を選び出し、授業内で提示して活用するなど単に研究として使用するだけでなく、言語教育などの現場でも活用できる可能性がある。と答え、指定討論は終了した。

3. 3. 2. カザフスタンの学生との議論過程

議論には本グループ 3 名に加えて、カザフスタン側から 4 名の学生が加わった。議題はまず、「どうすれば作文を上手に書けるのか」という点に集中した。その問題の背景にはカザフスタンの大学ではあまり作文の授業が開講されていないが、留学を考えると必ずと言っていいほど文章を書かせる課題が課されるため、文章力に自信がないという実態が浮かび上がった。そこで、日本側の学生からは「自分の文章力で自信がないのはどのような点か」という質問が出された。その点では、「作文の構成」という答えが最も多く、次に「文法」という答えが挙がった。それにはやはり日本語母語話者が少ないという環境が影響しているようで、「日本人と話すのは週に一度 1 時間ほど」「日本語の文章を読みたいが、どこで探したら良いのかが分からない」「小説を読んでも話し言葉が多い」などの回答があった。そして、

このような点を考えると、「作文データコーパスというのは、日本人がどのような作文を書くのかということが分かるため、利用してみたい」という声もあった。

次に議論は「どのようなコーパスを利用したいか、欲しいか」に移った。そこでは、カザフスタンの学習環境を反映しているものとして「質疑応答コーパス」というものが挙げられた。これはカザフスタンなどの中央アジアでは非常に弁論大会が盛んであるが、弁論大会に参加した際の質疑応答で「どのような言葉で対応したらいいのかが分からない」という現状から述べられたものである。日本語母語話者の中には「ビジネス語」も「質疑応答」も同様の対応で良いと考える向きもあるかもしれないが、これは日本語学習者が「ビジネス語」と「質疑応答」に微妙な違いを感じ取り、違いを知りたいと思ったからこそその意見であり、大変有益な意見であった。

3. 3. 3. まとめ

本グループでは発表・議論を通して、カザフスタンの日本語学習者は環境的に日本語に触れる機会が少ないだけでなく、どのような情報に自分たちがアクセスできるのかという、情報リソースを知らないという状況にあることを知った。それはカザフスタンの学生がしきりに言っていた「どこで探したらいいか分からない」という言葉からも推測できる。本発表を通して、コーパスを紹介できたことにより、カザフスタンの学生が述べた「これがあれば自分ひとりで勉強できる」という言葉は、当初、目的としていた「日本語教師に頼りきりになるのではなく、学習者の自立した学習の推進」という解決の方向性だけは示せたと思われる。

今回は今後、カザフスタンのように日本語母語話者が少ない環境の中で学習している学習者がどのように学習を役立てていけるのか、という具体案にまでは立ち入ることができなかった点はあるが、カザフスタンの学生も含めてお互いに積極的に現在の学習状況・日本語を学ぶ上での問題点・難しさについて率直に意見を交わせた点を考えると、本グループの発表・討論は大成功であったとしたい。

(以上、文責 人文社会科学研究所国際日本研究専攻 伊藤秀明)